峠三吉作品集

下

峠三吉作品集 (下)

1975年8月1日第1版第1刷印刷
1975年8月15日第1版第1刷発行
＊定価は函・売上カードに表示

著者 峠 三吉
発行者 山根 襄

発行所 株式会社 青木書店
東京都千代田区神田神保町1-60
振替口座・東京 36582 番
電話・東京 (292) 0481 (代表)
郵便番号 101

(分)0392(製)8165(出)0015 奥村印刷・高地製本

© 1975, *Aoki-shoten*, Tokyo

凡　例

一　下巻は、著者の遺した原稿やノートやスクラップ・ブック、および執筆した紙誌から抄出して分野別に編んだ。

一　作品の配列は、分野ごとに執筆年月日順によった。

一　作品の表記は、読みやすくするために新かなに統一し、一部の漢字は読みやすいようになおした。しかし、人名・地名および平がなになおすと妥当でない熟語などはそのままにした。

一　明らかな誤字は訂正し、旧漢字は新漢字になおした。また、著者の慣用している送りがなも正しくなおした。

一　ルビの多くは編者が付した。著者の付したルビも平がなおよび新かなに統一した。

一　句読点など、著者は比較的無頓着であったため、編者が適宜に付した。また、行かえも若干改めたところがある。

一　「あゝ」「つゝ」「さら〳〵」などはそれぞれ「ああ」「つつ」「さらさら」と字を埋めたが、「続々」などの「々」はそのままにした。「!」は「！」に統一した。

一　日記で、同一日の文章を略したところは「……」とし、本や雑誌名は『　』を付し、喫茶店名などは「　」を付した。また、編者が注を付したところは（　）をし編者と明記した。

目次

凡例

童話……1
百足競走 3　お爺さんと娘 12　ドッヂ・ボール 25

小説……29
遠雷 31　鏡占い 44

随筆・詩論・ルポ・宣言……63

I　随筆……65
拍手について 65　V青年に 67　港にて 69　新時代への苦悩 71
『悲劇』のひげき 75　私の恋愛観 77　ゴールデン・メダルによせて 79

II　詩論……81
生活のうた 81　「生活の詩」断想 82　美の解放 84　象徴的手法について 86　文学サークル運動について 88　一年をかえりみて 90　詩の話 93　子供の詩は教える 97　『原子雲の下より』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

序文 103

III　ルポルタージュ……112
たえまない闘いのなかで 112

IV　宣　言……117
吉田内閣打倒国民大会へ送るメッセージ 117　メーデーに送るメッセージ 118　平和擁護のための宣言 119　ことば 121　宣言 121

覚え書……123
メモ—覚え書—感想 125　子供ヲ思ウ 134　小さな娘のために 139

日　記……149
昭和二十年　—原爆直後 151
昭和二十一年—青年文化運動 158
昭和二十二年—愛 191
昭和二十三年—再生 240
昭和二十四年—新しい進路 246
昭和二十五年—溢れ 263
昭和二十七年—生活と文学 270
昭和二十八年—手術前 284

峠三吉年譜……292
解　説……増岡敏和 297
あとがき……峠　一夫 311

童

話

ここに収録した童話は、「童話」と題された一冊のノートに書かれていた五篇のなかから選んだものである。ノートの署名は「とうげ・みつよし」となっている。

五篇の題名とその創作年月日は次のとおりである。

『百足競走』――昭和二十年四月二十八日（昭和二十年十月二十日推稿）
『お爺さんと娘』――昭和二十年十一月二十日―十一月二十五日
『虹』――昭和二十一年三月九日―三月十一日
『ドッヂ・ボール』――昭和二十二年三月二十二日
『三人の子供』――昭和二十二年八月十四日

童話は昭和十六年（二十四歳）から書きはじめ、同十八年頃から鎌倉の阿貫良一に師事し勉強した。最初に書いた童話は『ヨハン少年物語（バルバラの恩返し）』（昭和十六年九月）であるが、これは自ら「完全ナル失敗作！」「カカルザマニテハペンヲ握ル資格ナシ、勉強セヨ！」と、綴った原稿用紙の上に記している。また、『シャボン玉とユリの心』（昭和十八年七月十五日）を書いている。以上の七篇が峠三吉の童話の全部である。

そして、戦後まもなく詩人兼童話作家になる決心をしたが、『三人の子供』以後は童話をやめた。

『百足競走』は、童話雑誌『銀の鈴』（昭和二十二年、号数不明）に発表され、はじめて活字になり、原稿料（八百六十円）をもらった作品である。『お爺さんと娘』は、昭和二十年十月から友人と焼跡ではじめた「みどり洋花店」の経験をふまえたもの。また、『ドッヂ・ボール』は広島県庁の憲法普及会が募集した文芸コンクールの童話の部で一位入選した作品である。当時、峠三吉は憲法普及会に勤めていたので、友人の村上の名で応募したものである。

百足競走

楠木国民学校五年級の生徒を、背の低い方から順に指を折ると、それが、山本、重井、泉、僕の仲間となるのだ。

僕達は、ほかのみんなよりも背が低く力が弱かったので、みんながどうかしてふざけてみたくて堪らなくなるような時には、きまって僕達の誰かがその相手に選ばれねばならなかった。

山本は剽軽なところがあって、成績もあまりいい方ではないことが知れていたので、名前の上の一字をとって、ヤマンヤマンと呼ばれていたし、重井は大人に向ってもはきはき口のきける正しい少年であったが、可哀相なことに生れつき片方の足が短かったため、皆からギットンギットンとからかわれがちであった。

泉は体が最も弱く、学校も休みがちで、先生から声を掛けられただけでもうおどおどするような子供であったが、家庭が比較的良く物覚えも良い方だったので、あまりひどい苛められ方はされなかった。

したがって僕達は団結した。教室で最前列に机を並べているように、遊ぶ時にも常に一緒であった。一人が苛められる時はかなわぬながらも他の三人が助けに赴いた。

中でも重井と泉とは、また特に心をつながせあっていた。

例えば鍛練の意味で全校生徒の運動場をぐるぐる廻る駆足が行われる朝など、よくうしろの方でわーっわーっとはやしたてるような歓声が起るので振り向いて見ると、皆と歩調を揃えて駆け続けることの苦手な重井が、五年級の最後から次第に遅れ、後を進んで来る四年級の縦列の先頭に邪魔され邪魔されして苦しんでいる様子は、一見とても滑稽に見えたりする。

結局走り切れなくなって列外に出るのだが、そんな時はいつもすぐに先生から落伍を黙認されている泉が、自分も走り切れなくなった風をよそおってついて出てやるのであった。

或る朝はまた暫らく学校を休んでいた泉が登校すると、僕の前に列んだ。最初から顔色が沈んでいたが、この朝礼が始る頃から妙におどおどしはじめた。首を硬くして絶対に後ろを向かないようにしていた。それかといって台上の

校長先生の方を見るでもなく、真直ぐに前面の校舎の壁ばかり見ているらしかった。

暫らくして僕はやっとそのわけが解った。その朝はちょうど毎月行われる全校各級別の出席競争の蓋が開けられる日に当っていたのだ。

校長先生は出席率の多い級の名を高々と読みあげて、その教室の入口に掛ける名誉の板を次々と代表に手渡すのだった。その板は黒漆の上に金文字で「優」と書いただけのものだったが、それを取れない組の生徒達は皆羨しく思わずにはいられないものだった。

朝礼が終り、列を作ったまま教室に入る頃から案の定僕達の級の後ろの方が騒々しくなった。誰かを非難するような声が聞えよがしに飛んだ。それは下駄を脱いで教室に入るにつれて高まり、全体に拡がった。先生の来る迄の手持無沙汰な時間を利用して、そのざわめきの間から、

「泉がいるうちは我々の級は絶対にあの札は貰えない！」

と誰かの叫び声がとんだ。するとあちらからもこちらからも、「そうだ、そうだ」と賛同する声が起り、不穏な形勢が教室に漲った。

泉は自分の机に蹣み込んで頭をかかえていたが、その手がいつもより一層青白く透き徹って細かに顫えていた。

すると突然一人の鋭い声が徹った。皆が思わず教壇の方を向くと、その上に重井が厳粛な態度で立っていた。

「体が弱いのは仕方がないではないか。そんな無理をいうのなら一緒に先生の所へ行こう！」

と外れたホックを掛け直しながら一層真面目な調子で怒鳴った。片足を爪立て、平均をとって突っ立ちながら。

皆はさすがに静まった。その時ちょうど先生の靴音がしてきたので、その騒ぎはそれで終りになった。

泉は授業が始ってから涙の溜った大きな眼で重井の方を見ると、重井は「何でもないよ」という風にちょっと笑ってみせていた。

さてその頃は運動会が近づく頃だったので、運動の下手な僕達はそれぞれに不安であった。

こうしたことのあった数日後、今度は重井が何となく浮かぬ顔をしていた。

彼は両手をポケットに突込んだまま、休憩時間にも下駄箱のある軒下に立ってばかりいた。むろん他の仲間には入らなかったし、僕達だけで毬を蹴っていても入って来なかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

彼は何か心配事があるのだろうか？　学課や宿題のことか？　いや彼は仮りにそれらがうまくゆかなくっても、必要以上に気にする少年ではない。もっと異った、友達への義理とか世の中へ対する義務とか（彼は既に社会の一員としての義務を持っていた）の方へ重々しく立っている男だ。

では彼の家庭における仕事のことか？　彼は比較的僕を信頼していたので、僕は彼の母と兄との三人暮しの家庭のこと、ときどき彼が学校がひけるや否や大急ぎに急いで家に帰り、直ちに「新美座」に俳優をしている兄のもとへ弁当を届けに行くこと、母もその劇場の下廻りの仕事をしていることなどを知っていた。

昼休みの時間に僕達は彼のいる所に近づいた。

それと察すると彼は笑いながら歩み寄って来て、僕の手の毬を取り抛り投げたり受け止めたりしてみせた。

僕はそれを制止しながら、今日はどうして一緒に遊ぼうとしないんだと訊ねてみた。

「何でもないさ」

「何でもないって変じゃないか」

泉も少し離れた所から僕達の押問答を気使わしげにみつめていた。

「何でもあるある」

そばから山本がふざけた声を出した。

「何でもないことがあるもんか。第一今朝から少しも一緒に遊ぼうとしないで何か考えてばかりいるじゃないか」

僕は山本にかまわず続けた。

「遊ばないことはないさ、じゃあ何か始めようじゃないか」

「駄目々々、ごまかしてもだめだ。どうして言わないんだ。言ってくれてもいいじゃないか」

僕は本気でつめよった。

「おう、僕は知ってるぞ……」

山本がまた赤い顔を笑わせながら叫んだ。

「重井の奴、きっと運動会のことが心配なんだ！」

「おい！」

重井も僕も思わずその方を睨むと、山本は舌を出しながら逃げ出した。

重井は黙りこんで足もとの石を蹴った。石はころんで水飲場のセメントに当った。僕はそれを眺めながらちょっと困った。で、とてもそんなことじゃないだろうと考えながら、

「運動会のことなの？」
と彼の顔をのぞきこんでみた。
すると重井は決心したように体を伸ばすと、後ろの柵に背をもたせながら真面目な調子で打明けた。
ちらと耳にしたところによると、今度の運動会で五年級は百足競走をやるらしいこと。それは四人ずつ一組となるのだから、一番小さい方はちょうど僕達四人になること。そうして足の悪い自分にはとてもあの競走はできまいと思うこと。といって自分が休めば折角の運動会にあとの三人は不出場になってしまうこと、などを。
これを聞くと僕達は考え込んでしまった。
なるほど、百足競走、これはむつかしい。どうせどんな競走でもめいめい勝てぬことは覚悟しているものの、四人が一組になって負けてしまうことは残念なことだ。だが皆の足を縦に片足ずつつなぎ合わせて走るこの競走が、重井にできるだろうか？　満足に歩調を合わせて歩くことさえむつかしい重井に。

その午後の体操時間に、やはり今度の運動会で百足競走をやることが言い渡された。そして組の割当もきまった。

僕達は重井の都合を聞いて、その日の帰途、泉の家に集って協議することにした。
泉の家は広かった。僕達は来馴れていたから勝手口から入って、てんでに庭へ廻った。庭には大きな築山や池や、それに渡した橋などがあったので、こうした庭のいつ来ても珍らしい僕達は、忽ちふざけてそこらの木陰へ隠れたり、追っかけっこを始めたりした。
しかし家の方へ行っていた泉が戻って来ると自然集って、腰を下すに恰好の石や芝生のある場所に陣取った。
「さあ、遅くならぬうちに何かいい方法を考えようじゃないか」
僕は皆を促して口を切った。
三人は急に押し黙って、近くの松の葉をむしったりし始めた。午後の赤茶けた日差しが築山の向うから静かに洩れさしていた。松の木の皮が熱っぽく剝がれていた。
少し離れて、どう考えても駄目だという風な顔で立っていた重井が、
「僕は出られないから三人でやるように先生に頼んでみたらどうだろう」
とゆっくり言った。

「そ、そんなこと許されるものか！」
僕らは一斉に撥ねつけた。
「第一他の者が許しゃしないよ。そんなことをせずにやろうと思うからこそ、こうして集っているんじゃないか」
僕らは重井が平気な顔をしているのが腹が立った。
一年にたった一度しかない運動会に全然出場せず、見物人になっているだけで、どうして済ませる気なのだろう？
今まで黙っていた泉が遠慮深そうに言った。
「一体、百足競走ってどうするの？」
そこで僕達は彼に教えかたがたやってみることにした。
物置から縄を引っぱり出して来て四人縦に列び、右足は右足、左足は左足とつなぎ合わせ、足首も無理やりにつないだ。
そうして互いに前の者の肩につかまりながら、駆け出そうとすると、駆けることはおろか、最初足を動かすことさえ自由にできなかった。
そこをどうにか気をそろえて、掛け声をかけながら二、三歩駆けてみた。すると忽ち最後にいた重井が、
「待ってくれ、待ってくれ」
と叫びながら尻もちをつき、先頭の僕はその反動で四つ這いになった。山本も泉も堪らず倒れた。四人は暫らくそのままの姿勢で思い切り笑った。
さてそれから何度もやってみた。重井の場所をいろいろ変えてやってみた。先頭は最もむつかしいのでいつも僕がやった。だが幾度やってみても、せいぜい五米と続かなかった。
夕ぐれが近づいて来て皆はすっかり疲れ切った。もう足首の縄を解くのも面倒になって来て、芝生に思い思いの方向に横たわっていた。石に頭をのせると汗ばんだ体にひいやりと気持が良かった。
山本が軍歌を空へ向けて唄い出した。重井が半身を起して、
「そろそろ帰ろうか」
とつぶやいた。
そのとき皮靴を（皮の靴をいつも穿いているのは彼だけで、あとの生徒は大部分ゴム靴だ）脱いで砂をふるい終った泉が、何かこっちを向いてもぐもぐと口籠って言った。
「え？　何」
（困憊の底にあった）
困り切ってしまっていた僕は、何か名案があったのかと

大声で聞き返しながら撥ね起きた。山本も歌を止めて起き直った。

泉はちょっとはにかんだ微笑を浮べ、赤くなりながら、僕はこう思うんだとぽつりぽつりと語った。

それは全く何という名案だったろう。そんな簡単なことを今迄なぜ気がつかなかったのだろう！

泉は遠慮しいしい、でもはっきりとこう言った。

「重井君は足が悪いんだ。だからどうしても僕達に歩調を合わせて駆けることはできないんだ。これは僕達三人が重井君に歩調を合わせなければいけない。むつかしいかもしれないけれど、重井君を先頭に出して、それに皆が調子を合わせてみよう」

僕達は一言もなく賛成の声をあげて踊り上った。そうして最後の試みをやるべく足の繩を結び変えた。重井も決心し、嬉しそうに力んで先頭に身構えた。

四人は今度こそどうしても成功させねばと覚悟をきめ、細心の注意をもってそろそろと駆け出した。重井に倣って一斉に体を左右に振りながら……。

と、どうだろう。意外にうまく行きそうだ。四人は歓声をあげた。歓声が大きく掛け声に変った。そうして笑いながら倒れて停止するまで、三十米くらいは駆けただろう。

有望々々！と僕達は勇んだ。

そうしてこの計画で、当日までできるだけ練習をしようと約束した。

事実、練習をした。そうして兎に角、百米駆け通せるくらいの（速度はさておき）自信をつけた。

運動会の当日が来た。朝はもうすら寒くさえあったが、生徒達は真新しいシャツやパンツをつけ、裸足で家から駆けて集った。

広くもない運動場が、楠の樹を真中に美しく飾られ、それを取り囲む観覧席に敷きつめられた新しい蓆の臭いがプンプンしていた。

会が開かれるまで生徒達は、裏庭の方に集められていたが、もう皆わくわくしてじっとしてはいられなかった。

意地の悪い連中は早速僕達の方にやって来て、例のように帽子を取ってみたり、足をからんでみたり、丁寧な奴は重井の前に行って、

「どうだ、今日の競走ができるか？　下駄と靴と片っぽずつ穿いたらどうだ？」

とからかった。

会は校長先生の挨拶から始められた。興味を増すために、競走者は総て赤と白に分けられ、順位によって計算された点数が、大きく書き出された。

生徒達の父兄を主とする見物人は、近所から押しかけて、見る見る満員になった。万国旗やテープのちぎれが、場内を風に吹かれてころがった。胸に造花をつけた役員の女生徒達があちこちし、拡声器のレコードが勇壮な行進曲を撒きちらした。番組は滞りなく進行した。

昼の愉しい休憩時間が済むとまもなく、僕達の百足競走が始った。競走の途中で停止したり崩れて倒れたりする者らがどの組にもあって、そのたびに見物人は湧いた。

番が進んでくると、僕達の胸はどきどきと高鳴って仕方がなかった。山本は一層赤くなり、泉は冷たく蒼くなった。

僕達はビリになってもいいから、兎に角途中で倒れないようにしようと、幾度も言い言いした。

種目が終りに近づいて、いよいよ僕達の出ねばならぬ時が来た。僕達は他の三つの組とともに出発点に並んだ。重井、僕、泉、山本の順に片足ずつつなぎ合わせて、互いに前の者の肩を摑んで身構えた。

他の組の者達は、僕達のことは全然気にかけていないようだった。先生がひと渡り皆の顔を見渡した後、ピストルを撃った。

百米のコースは楕円形をしているので、出発と同時に、どの組も一番内側を走ろうと焦った。足もとを狂わぬことのみに全力を傾けている僕達は、自然一番最後になった。

ところがまだ何程も行かぬ中に、内側に入り込むことを焦った一と組が、足をもつらせてわいわい言いながら停止してしまったため、僕達は何なくそのそばを通過して三番に喰い込んだ。これでビリではなくなれるぞ、という気持が僕達を一様に勇気づけ、次第に思わぬほどの速度が出はじめた。僕は僕の前で懸命に両腕を振り、体を動揺させながら駆ける重井に合わせて、体を振った。後の者もそれに合わせて、一足毎に体を左右に振り、肢をひろげながら駆けた。そして小声で思わず調子をとった。

ふと気がつくと、それは練習中にもない不思議な快走だった。四人の呼吸が寸分のスキもなく合わされていた。

見物やその前に腰を降した生徒達の声が高まるとともに、いつか僕達は二番を走っている組と、殆んど並ばんばかりに走っていた。僕達は次第に気が落着き、ただこの調子を

崩すまいと努めた。お互いの心が弾みながら、まるでいたわり深く溶け合うようだった。

僕達の口をついて出ていた「ワッショイ、ワッショイ」という小さな掛声に、自然に「ころぶな、ころぶな」という合いの手が入れられていた。一番後ろの山本の口から出ているのだ。あたりはしんとして感じられた。

「ワッショイ、ワッショイ、コロブナ、コロブナ」と僕達は全く真剣に、祈るように、掛声で調子をとりながら進んだ。

この僅かな息を呑んだ静寂の中で、この掛け声が甲乙なく平行して進んでいた相手の組の耳に入った。こちらが真剣に発していた言葉が、相手にはひどく滑稽に聞えたらしい。その中の誰かが突然噴き出した。それでもういやおうなかった。相手の組は忽ち足並みが狂い、倒れそうになってよたよたと止りかけ、二、三尻餅をつく者もあったようだ。

僕達は揚々とそれを後にして駆け続けた。もう百米の半ばを過ぎていたが、先にゆくものは一と組しかいない。僕達はこのままで行ったとしても二番になれるのだ。これは何という思いがけないことか！

楠の樹が光ってざわめくのが眼に入った。

不思議な快調はまだますますうまく続いた。重井は渾身の努力をしているらしく、僕によっかかるほどに体を反らして、はっはと息をつくのが察しられた。僕も疲れてきた。もちろん泉も山本も同じであったろう。

しかしどうだろう。決勝点が近づくにつれて、一番との距離が次第に縮まるように見えた。いや見えるだけではない。確かに僕達は彼らに迫っているのだ。その証拠に、見物の応援の生徒達の熱狂の声が波打つようにして高まって来るではないか。

僕達の赤い帽子に対して、彼等は白い帽子だ。僕達もいつか落着きを失った。

「ワッショイ、ワッショイ、コロブナ、コロブナ!!」

と今はもう遠慮なく叫びながら、ひろげた足を次第に急調子に動かした。重井はびっしょり汗をかいて、頭までひどく左右に振っていた。

楠木の陰を過ぎて、職員席の前を通り、決勝点の目前迄さしかかった時、周囲からの歓声は頂点に達し、僕達は先頭の組と平行した。

赤や青の旗がちらちらと眼を掠め、耳が聾のように鳴っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c